

関西学院大学 研究成果報告

2020年 4月 7日

関西学院大学 学長殿

所属： 文学部
職名： 教授
氏名： 橋本 安央

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input checked="" type="checkbox"/> 特別研究期間 <input type="checkbox"/> 自由研究期間 <input type="checkbox"/> 大学共同研究 <input type="checkbox"/> 個人特別研究費 <input type="checkbox"/> 博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	Raymond Carver研究
研究実施場所	自宅、個人研究室
研究期間	2019年 4 月 1 日 ～ 2020年 3 月 31 日 (12ヶ月)

◆ 研究成果概要 (2,500字程度)

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

集中的にレイモンド・カーヴァーの散文と韻文を読みつつ、各種先行研究にも目をとおり、総体としてのカーヴァー文学論を構築するための準備作業を行った。中途の成果報告として、以下の三点を活字にし、あるいは口頭で発表した。

1. 「レイモンド・カーヴァーの空——あるいは、空を舞う文学」（石原剛編、『空とアメリカ文学』，彩流社，2019年9月20日発行）
2. 「冒険の残滓——『ロビンソン・クルーソー』から300年」（日本英文学会関西支部第14回大会シンポジウム，2019年12月8日）
3. 「告白と祈り、あるいはレイモンド・カーヴァーにおける改稿の問題について」（『照応と総合』，吉田朋正編，小鳥遊書房，2020年5月発行予定）

1はカーヴァーの作品群に窺われる、航空機や空のイメージに着目した論考である。カーヴァーは通常、労働者階級、あるいは貧乏白人を描く作家と評されることが多いが、そのわりには、クルマやアムトラック、グレイハウンドといった移動ツールが援用されることはあまりなく、散文においても韻文においても、航空機が舞台の小道具として利用される傾向にある。それはすなわち、カーヴァーが、航空機や空の隠喩的効果に通暁していたことを意味するのだが、この原稿ではその多義性を、丹念に追いかけた。具体的にいえば、駅舎と比較した上での、空港という空間にまつわる、異文化が交差する非日常的特性、およびそこに伴うひととひととのつながり、その切断という主題、大人のツールとしての小

型航空機が子どもたちの魚釣りの光景と交差することによって醸しだされる、少年期に終焉が近づいているさま、航空機に搭乗することで、動くことも逃げることもかなわぬ密閉空間が作りだされ、親密なる空間にある夫妻の、孤絶した両義的な心理などが、カーヴァーの散文と韻文では前景化されている。あるいは地上からジェット機をみあげつつ、一直線に夢なき未来と死に向かうほかない、さもしい現代人の現実と宿命、哀しみも、描かれる。あるいは逆に、たとえ束の間のことであろうとも、航空機で移動してきた盲人とのつながりをつうじて、世俗の日常から祝福と救済の高みに舞いあがる男の姿も描出されることを論じた。

2 および3は、カーヴァーの出世作たる短篇作品集 *What We Talk about When We Talk about Love* (1981年) が、没後明らかになったことだが、編集者ゴードン・リッシュの手によって、大幅に改変された点に着目し、そのオリジナル版たる *Beginners* (2009年) との照合作業に基づいたものである。それをつうじて、カーヴァーの特性およびリッシュの特性を焙りだした。具体的には、2において "If It Please You" (*What We Talk about* では "After the Denim")、3において "Where is Everyone?" (*What We Talk about* では "Mr. Coffee and Mr. Fixit") および "A Small, Good Thing" (*What We Talk about* では "The Bath") を、それぞれ引きあわせた。

2の口頭発表用原稿の表題は、「この小さな、小さな世界に」というものであるが、ここでは他所者のヒッピーのカップルが、ビンゴゲームでイカサマをしていることに気づいた男の、心の歪みと祈りの主題をとりあげている。彼の妻は、ゲームのさなかにおそらく子宮がん再発の兆しに気づくのだが、かくして夫は、ゲームにも、人生にも、justiceとfairnessという倫理性が欠落していることに憤る。ビンゴゲームの当たりはずれは、偶然という名の運、luckに依存するのだが、病気の当事者である妻は、夫とは異なって、fairnessではなく、luckという偶然の巡りあわせの問題として病気のことを捉えつつ、涙をこらえることがかなわない。Poetic justiceなど存在しようもない、二人の世俗的な一晚をめぐり、リッシュ版ではすべて削除されている要素、すなわちふたたびアルコール中毒に墜ちかけた夫が、祈りの言葉を反復することで、宿命論的不安感を静めることができるという、小さいけれどもとても大きな救済の瞬間が、カーヴァー版の主題であることを論じた。

3の "Where is Everyone?" ("Mr. Coffee and Mr. Fixit") については、自身のアルコール依存症が原因で、家族を崩壊させた男の贖罪感、自己糾弾という、おのれに向けられた批判と皮肉が、たとえば日常的な口語表現である wash one's hands に隠れている、現代においてはほぼ意識されることのない宗教的含意をつうじて描かれる一方で、リッシュがそうした贖罪意識をすべて削除し、神も祈りも不在である現代社会における、スタイリッシュな笑いに収斂させてゆくプロセスを跡づけた。同様のことは、"A Small, Good Thing" ("The Bath") にもいえる。リッシュによって削除された箇所を追いかければ、カーヴァー版の主題が、息子の交通事故を契機として結ばれる、夫婦の絆であることが浮かびあがる。あるいは母親が「妻」になる、そうしたプロセスの事柄である。そしてまた、エンディングにおける聖餐式的エピファニーが、そこに重ねられるということである。そうして突然訪れる、旧約聖書ヨブ記のごとき、神による罰という主題が、浮かびあがる仕組みになっている。それはリッシュ版でも、まったく異なるかたちではあるが、ある程度残存しており、汚れを清めるユダヤ教のミクワーという宗教儀礼をひそかに想起させる、表題の改変そのもののなかに窺われる。だが、主としてリッシュ版では、現代社会の地方都市に暮らす夫婦に突然訪れる、ホラー小説のごとき悪夢の空間が前景化されている。現代の消費社会に伴う、ひととひととの分断や、共感や心の交流の断絶、そこから生ずる不気味、恐怖の不安定な在り方が、悪意と受難、暗黒と残酷を強調するリッシュ版の主題である。"A Small, Good Thing" は、のちに作者自身によっても改稿されることになるのだが、それをつうじて浮かびあがるのは、神を前にした「罪」と「虚偽」というカルヴィニズム的世界観から、作者が妻を引き剥がそうとしているさまである。そうして罪の意識を夫ひとりに収斂させることで、物語の焦点が絞られてゆくプロセスも論じている。

激しい絶望があるところにしか、浄化と救済を求める激しい希望は生まれえない。従来ミニマリズム的と評されてきたカーヴァー文学は、実のところそうではなく、むしろ、現代における祈りの可能性を紡いだものであるといつてよい。

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内 博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。